

二〇二二年十二月六日

地域福祉を支える市民協同パネル・世話人会

第三回座談会

「生協の地域での関わりをていねいに視る」

……「コープぎふエリアマネージャー 森 好浩さんの報告

「安心して住み続けられるまちづくりの会」に関わって……

進行役：仲田伸輝さん（元名南子どもの家理事・研究センター常任理事）

報告者

コープぎふ 岐阜圏域マネージャー 森 好浩さん

座談会参加者

飯村さん：コープみえ組合員

河田さん：コープあいち・コープ相談センター

小池田さん：名古屋市森の里荘自治会会長

豊田さん：仕事工房ポポロ副理事長。

向井さん：コープあいち参与。研究センター常任理事

鈴木さん：研究センター事務局

椋木：研究センター事務局

●向井さん：本日は、前回の振り返りとコープぎぶより報告をいただきます。

冊子の表紙をごらんください。地域福祉を支える市民協同パネルでは、「協同」というのは協同組合や協同組合とつきあいのある様々な地域団体の話にとどまっていますので、ここでは協同組合を含めた組織が、地域ではどついうふうに関係の福祉を担っているかということを探るといのがテーマです。その場合にいろんなアプローチの仕方がありましてね。仲田さんからは、社会福祉制度や社会福祉の法体系をきちっと理解してやっていかないと、協同組合が何でも手を出さず、参加するということとは良くないんじゃないか、そういう法的な社会福祉という枠組みで執行することが大事だということ指摘もいただいています。

このパネルでこの間やってきたことは・・・今日は、第1回第2回、第3回の座談会を終えて、第4回目ということなんですけれども、1回目、2回目とそれぞれ、地域福祉に関するポジションがやや共通するところの事例を紹介し合って、地域福祉と市民協同の関係を考えようとしてきました。

第1回目はそれを地縁組織からということと、もともと地域にある住民組織や民生員さんなどのつながりがあるような社会で、どんなことがあるのかというようなテーマです。この(冊子の)四ページ四二ページに、そのときの報告の一覧表がありますので見ていただきたいと思います。1回目では、今日もお越しいただいている小池田さんから、森の里の自治会という組織における、住民や団地にお住まいの方に対する支援活動がどうなっているか、という報告もいただきました。

幸松さんからは、名張市の比較的新しい住民参加型のまちづくりの経験を、報告していただきました。

小牧の松浦さんからは、もともとある地域の本庄地域ということですが、会館を活用するにあたり、3あ事業を小牧市が始められましたが、その3あ事業を使って、そこに住んでいる人たちが、子育ても終わってやや余裕ができたみなさんという印象を受けましたが、自分たちが子育て中に子ども会を解散した最後の世代で、その世代が今の時期に、あらためてもう一度地域の組織を作ろうという実践を、自らすすめられている事例を報告していただきました。

中島さんからは、中島さん自身もそうですが、様々な障がいを抱えた子どもさんといっしょに、三重県の熊野市を中心にしたところですね、この地域の中で孤立してバラバラで関わらざるをえないという中で、すぎママの会を作った。そして、一人一人の家族の持っている問題を解決するという組織づくりをしたという経験。地域に密着した組織の中で、お互いの生活問題や地域問題を解決する協同のプロセスが、始まっているということ学びました。

この中でもいくつか協同組合の関わりが語られたところもありますが、協同組合の姿がみえないという指摘を受けたところもあります。ほとんどの方が組合員ですので、組合員自身が関わっているということはありますけれども。個の組合員としての関わりはあっても、生活協同組合組織としての関わりは、それぞれの状況があるというのが、第1回目の地縁組織が進める地域福祉と協同組合の関わりでした。

第2回目は、これは小池田さんから表現を教えてくださいいただいた志を持った組織、志縁組織が地域福祉の担い手になっているということもあって、座談会を持ちました。(冊子) 四四ページにあります。岐阜で引きこもりの青年、といっても年を重ねた方もいらっしゃいますけども、そういう人を支援されている豊田さんからの報告。そして生協の組合員である内藤さんから、ご自分の家を開放して子育てひろばを作り、社会福祉法人池内福祉会の事業として行うことによつて、地域の子育てに悩む親子やみなさんのつながりを作っているという事例です。それから、津坂さんからはワーカーズコープで働いているという立場から、労働者協同組合という運動からみた地域との関わりを話していただきました。

それからもう一人が、コープぎふの伊藤さん、くらしたすけあいの会が抱えている変化、そういうところから報告していただきました。それぞれ、NPOであったり社会福祉法人であったり、ワーカーコープであったり、任意組織ですけども協同組合型の自主的な相互扶助組織、の経験をうかがいました。これが前回の報告で得られた地縁組織と志縁組織の状況です。

今日は第3回座談会のパートⅡですけれども、第3回目のパートⅠがもう一冊の世話人会の座談会の冊子で、地縁組織と志縁組織の大枠を見ただうえで、生活協同組合はどうなんだろうかということを見たのが前回です。コープあいちの河田さんからは、コープ相談センター、生協の相談機能がどんなふうに地域の生活問題を受け止めるかということで、愛知県と進めている協働事業の紹介です。

NPO法人MtOMの服部さんからは、瀬戸の福祉のまちづくりということですが、服部さんは今、南医療生協の理事をされていて、瀬戸のまちづくりを医療生協やコープあいちにも声をかけてもらって、協同組合と一緒にまちづくりをするという関係にあるNPOの経験です。名古屋大学の前田さんは今、外国に留学をしていて参加できないのですが、4年ほど前に多摩市でNPOの調査をした時に、いずれも生活クラブなどの生協組合員がその組織の中心になっていたということで、協同組合に関わる人が作るローカルな市民活動をとおして、協同組合の関わりを表現されました。

そして南医療生協の支え合いセンターの土屋さんからは、南医療生協の地域ささえ合い事業ということで、病院から退院した方を地域で組合員が支える。そのために病院を退院する時に患者さんが持っている生活ニーズをキャッチして、地域のみなさんが見守りであったり食の問題であったり、日常生活を支える取り組みを始めたという経験です。いずれも協同組合が関わっている、新しい変化が見られている話です。

今日の前半では協同組合の4つの報告の中で、協同組合と地域の福祉の取り組みがどうなっているかということ振返りを、その上で、森さんから報告いただける中身は、コープぎぶが地域の中でまちづくりにどう関わっているか、全体像と実践を報告いただけるのではないかと思います。そういう点で、生活協同組合と地域あるいは地域福祉に関する協同組合組織が持っている可能性や、そこから生まれるものは何かということをご報告いただきたい。

協同組合が、ということをご2回に分けてやった主旨は、協同組合は事業的な側面もあるし、組合員活動もあるいろいろな広がりを持っていますので、それぞれ分解しながら、その持っている可能性をいねいに追いかけたほうが良いということです。出来ればこのあとの報告や意見交換についても、その実践の広がりとして生活協同組合固有の役割は何なのか、ということが引き出せるような意見交換をしていただければと思います。よろしくお願いたします。

●仲田さん：初めての方もいらっしゃいますので、所属やお名前を。所属がない方は関係性をご紹介下さい。

●森さん：まず最初に、「安心して住みつけられるまちづくりの会」というのが地図をいっしょに作りました。大洞地域の地図です。真中に市立芥見東小学校があります。そのすぐ下に、コープぎふ大洞虹の家があります。ここが活動拠点になっています。この西の方にはコープぎふ芥見店があり、165号線につながります。東の方に行きますと関ヶ原抜けです。

これは(写真)虹の家でのフリマ開催の様子です。驚いたのは、お年寄りが結構集まって来たということ、外国の方もみえます。虹の家の参加者、おひとり暮らしの方も参加しています。声をかければ集まってくる所かなあとも思いますけど、楽しそうなコミュニケーションが繰り広げられていると思えました。こういう生活

動、何でもない活動ですけど、どんとんできるといいなあと私はいつも思っています。

今一番問題にしているのは、中央の大洞西地域、団地ですけれども、ここが高齢独居の方が一番多い。藍川高校はもう廃校になってしまっています。一時は子どもたちが多くて人も多いところだった。

大洞西の大洞団地は四階建、五階建、二階建のアパート（2P）です。

そのほか大洞緑団地もあって、桜台、柏台、霧ヶ丘、紅葉が丘、1970年代に建てられた団地です。最初に中央に建てられた団地は昭和四一年代に建てられました。

地域の特徴としては、高齢、独居、貧困、障がいや認知症、ひきこもりのある方がお住まいだと思います。自治会費の未払い、ゴミが出せない、セーフネットにかからない人が、この中には何人かみえるということです。

岐阜市は配食サービスで安否確認をやっていたんですが、少なくなっていく傾向にあって、この地域では撤退しているのではないかと思います。

高齢化率（2010年）、岐阜市の高齢化が23%。芥見東校区28%、高齢化世帯が167、独居が168、芥見南校区30%、高齢者世帯が45、独居が105。真ん中の大洞団地では、一人世帯59%、二人世帯26.3%、約80%が一人あるいは二人世帯。大洞緑団地（公園）は、各団地エリアにいくつかあります。ここでも一人、二人世帯が50パーセントを超える状況です。この当時、生協の組合員数は2374世帯、

共同購入399世帯、個人宅配104世帯、宅配弁当の利用は、まだ少ないです。

高齢者が多いので、OCRが書けないだとか、荷受が思うようにできない、引き落としの問題も絡んでくると思います。

これが中央のセンターの団地です。二階建ての2Pといわれるところです。思ったよりきれいなんです。お年寄りが多いと思いますが、雑草が生えていたり、ゴミ屋敷になっているところというところは少ないです。こちらは四階建五階建のアパートで、エレベーターがない古いアパートです。家賃は最低8,900円、これは市のHPから。大洞緑団地でも最低は7,800円の家賃です。

名前が入っているところと、入っていないところがありますが、お住まいになられてないところも結構あります。423世帯、これは健康友の会の方が訪問されて出した数字だと思しますので、かなり正しい入居数だと思います。

会の発足動機は、2010年に西の市営住宅で白骨化した二人の死体が発見されたということです。認知症の母親と障がいのある娘さん。おそらくお母さんが倒れられて、そのあと娘さんが亡くなられたんじゃないかな。ちょっと前に北海道でも同じようなことがありましたけれども。この年もう一件、障がい者が亡くなられていると聞いています。

これが会の始まる動機になりました。決してここだけの問題じゃないですね。岐阜県の中で一番孤立死が多

いのは大垣市、岐阜市内でも私の住んでいる地域でも、古いアパートで2年に一人ぐらい死んだ人が発見されているので。

まちづくりの会の目的は規約書に載っていますが、最初の会長さんが作られたものですが、現代日本の高齢化は世界のトップクラスに入り、高齢者を含めた弱者をどう支えていくかを問われている。高度成長期以来そのつながりの希薄化が進行し、無縁社会の中で一人さみしく亡くなっていく孤独死が、全国の中で数万人規模で進行している。憲法第二十五条を活かし、誰もが健康で文化的な生活を作っていく必要性をみんなで考え合おう。そこから現代社会の生きづらさの根源を問い、健康で安心して住み続けられるまちづくりの展望を示す。二十五条って僕あまりよく知らなかったんです。

憲法二十五条の条文・・・

第三章 国民の権利及び義務

第二十五条 【生存権、国の社会的使命】

第一項 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

第二項 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

取り組んでいる事ということでは「虹の喫茶」を月に2回コープ虹の家で開催し、安否確認とコミュニティの場を図る。先ほども言ったとおり、虹の喫茶は非常に良い立地条件にありまして、この大洞西地域からも来られますし、団地の中心にありますので、いろんな方が参加できます。会の目的は、喫茶開催のための資金を集めている。基本的な人権を守る活動や孤立死を出さない実践活動や、会の目的に沿う学習会や視察を行っています。

月に一回役員会を開いて振り返りと……。私も役員をやっているんですけど、本業の生協の仕事がありませんので、いつも出られる状態じゃありませんので、虹の喫茶をのそいたりして、極力会には出られるようにはしています。

会の構成メンバーは資料の通りですが、母体となったのは健康友の会、勤医療のみどり病院、年金者組合、環境を守る東部まちづくりの会では・・・「たんあくたみ」というミニ誌を発行している。それからコープぎふも入っています、この五者が最初の呼びかけをして、この会を作りました。現段階では、個人会員が13名と団体会員が6団体、ほとんどがこの周辺の団体です。学習会は、発足してまだ二年目ですが、松戸市の中川さんと呼んだり、岐阜大学の小井戸先生、先生は柏台に住んでいますので、ちょうど震災のあとでしたら防災に頼り切るかという話。篠崎先生、コープぎふOBの中谷さんにも来ていただいてお話をしていたきました。それから認知症の学習会をみどり病院の看護師さんに来ていただいて、スタッフメンバ

ーも学習会をしよう……。近くにバローの店もあるんですが、そこで黙って商品を持ってきちゃうおばあさんがありまして、認知症の方なんですけど、それを「もらったもらった」って言いながら見せる。みんなそれを返しに行くんですが、「そういう方の対応の仕方なんかも学んだ方がいいね」ということで、学習会をやりました。あとは毛利さん（生協のアドバイザー）の話も聞きました。

ついでの間ですが、メンバーに金沢に行っていたいただきました。笑って死ねる病院だとか。今度は袋井市の稲葉さんの講演会をやる予定にしています。

資金集めなんですけど、最初の頃は、みんなでぼくたちも含めてお金を出し合って、喫茶のお菓子やインスタントコーヒーを買うという形でやりました。喫茶に参加する人にもカンパを求めたんですが、お金を出した方が気楽だという人もいますが、お金を出せないという人もいますので、喫茶でのカンパは中止しました。学習会のカンパも任意で。2011年度は岐阜市の事業助成を受けることができましたが、12年度は受けられません。で、フリーマーケットをやってお金を集めました。2012年度は生協のささえあい助成を20万円受けることができました。コープぎふは飛驒（おたがいさま飛驒）のほつも30万円受けました。

虹の喫茶の様子は、コープぎふ虹の家の1階で、第二・第四火曜日やっています。十時から十一時半、参加の制限は一切ありません。年齢性別問いません。近くに老人医療施設がありますが、そこから来たいと言わ

れば、どなたに参加していただいてもいいことにしました。団地外の方も来ていますが、やっている事は、インスタントコーヒーやお茶、お菓子を出して、あとは出入り自由。飲み物のお替りも自由です。やっていかんのは販売や勧誘行為くらいです。若い人、青年とは言いませんが、パソコンを持ち込んでいろんなことをやったのだとか、いろんな趣味のものを見せている人もいます。一回の開催時間で30名くらい。最初は十数名でしたが、ただひたすらおしゃべりするだけです。喫茶ではここに来てみんなとおしゃべりするの楽しい。喫茶の日は朝9時から来て待っている。曜日感覚がない方もみえて、ずっと待っている方もみえますね。外に貼り紙がありますが、曜日が変わらない人には声をかけてあげるよりしかたないですね。家では文鳥しか話し相手がない、という方もあります。

喫茶の日に楽しみにしている。とにかく来ておしゃべりするの楽しい。特別なことはしないことにしました。囲碁や将棋、音楽だとかいろいろやって楽しみを作ったらどうだ、という話もしたんだが、こちらからするのはやめにしましょう、ということにしました。何かをすれば人間に差ができるということ。勝手にやっているのはいいですけど。一人でできて話せない方もいますので、そういう方にはスタッフが主体的に声をかけていく、ということになります。特に外国籍の方は苦手な方が多いですね。

自分の思いを人に話したいということ・・・。「解雇されてしまいました、今、年金4万円でしか暮らせない、暖房費がないんや」ということでした。」そんなことがないから、風間から酒を飲んでいるんや」という方

も見えます。「生協の店は高くて利用しないよ、近くの三心というスーパーへ行きます。話す相手がなくて寂しい。」

西地区の老人会会長の堀江さんという方にも、この会に入ってもらっているんですが、呼びに行かれてノックすると、勧誘と思われて警戒される方が多く、裏口から声をかけていると思います。堀江さん自身も高齢なんですよね。

誰かに話すことから次につなげましょう。まず顔見知りを作りましょう。顔見知りを作ることで、気にかけてくれる人が増えます。好きなだけしゃべることが大事です。これが脳の活性化を促して、認知症も遅れさせるんじゃないかという話もありますので。

健康への心配もありますので、みどり病院の健康相談も始めました。看護師さんたちも勉強になるんですねそこへ行く。生活への心配ということ、暮らして何でも相談、森久江さんというのは元共産党の（岐阜）市議さんです。相談員の免許も持っていらっしやいますので生活保護の話、実際に生活保護が受けられた方もあります。とにかく話すことから次につなげることを考えなくちゃいかんと思います。

不参加の方も見えますので、電話がけをしたり、訪問、ご近所の人の情報収集もしながら安否確認をしようかということ。ナラシ時きをしているんですが、ポストティングをした時に声がけをしています。この回地、ほとんど行っていません。

喫茶の運営課題・・・資金不足、人手不足。若い力がかなり不足しています。もう平均七十代だと思います。お世話する側の高齢化とスタッフの不足。喫茶開催時間の拡大・・・これ以上できないな、生協施設の利用制限、利用者の期待、生協の施設ですので、生協の会議と重なってしまったりとか、ここで介護の訓練をしたのだとか・・・そういう時は残念ですが、時間帯を変更することがあります。その代わり安い価格で、会は家賃月5,000円を払っているだけなんです。

参加者情報の把握、参加者リストを作っています。これは未公開なんです。何回来ただとか経歴などをメモっていますが、あまり共有化はできていません。

(虹の喫茶に)来るだけになってしまっているんですけど、来るだけでもいいんですけど、やはり次のステップを考えなければいかんねという段階に来ています。

当初立ち上げたときは、会食やサロンもできるといいねという話だったんですが、展望があったのですが、とてもじゃないけどそういうレベルまではまだ到達していない。

事故対応、ご高齢の方が多いため、転倒、持病、発作。AEDの設置もしました。ここへ来る時ではないですが、芥見店に買い物に行く時に、道の途中で発作で亡くなられた方がみえて、それが早く発見できてAEDを持っていけば助かったねという話もあって、お一人暮らしの方ですが、お気の毒なことをした。この喫茶に来ている方でした。

会の展望づくりもそうですけど、地域の展望づくりもちゃんとして行かないかな、ということ、少しずつ展望が見えるといいなあと思います。僕はここ（大洞地区）の人間ではありませんが。それから、利用者の課題ですけど、参加したくても行けない、距離の問題であり、手段、体の問題。喫茶の情報不足、「お金を払わないかんのではないか」とか、「私は参加できないのではないかな」と、勝手に思い込んでいる方もたくさんみえるんじゃないかと思います。

金銭的な不安。自宅に介護をしなければならぬ人がみえる、旦那さんや子ども……。見えない壁がいろいろあるみたいです。セルフネグレクトの方はどこまでみえるかはわかりませんが……。みえるのでは。行きたくない人もみえます、はっきり言われる方もいて、そういう自由もあると思います。

地域の課題として……。共助に参画出来る仲間をもっと増やさなくちゃいかんと思います。地域ぐるみや、個人、諸団体とのネットワークづくり……。いろんな人に呼びかけをしているんですが、あまり反応が良くないんです。自治会長さんの訪問だとか民生委員さんの訪問なんかもしているんですが、あまり反応が良くないです。

その裏には地域全体の高齢化もあると思いますし、次の世代につながるというのが少ないような感じがします。若い人たちが居住地域の何に関心があるのかが見えにくくなっていて、ほとんどこの地域から出て行って仕事をしている方が多いと思います。岐阜市街、名古屋まで、大山とか。この先、公助へつなぐ事例づ

くり、計画や関係者つくりをどんどん広めていかなければいかんと思います。地域住民を巻き込まないといかんという事です。将来につなぐ関心者を増やしていかないかん。バザーをやる時には幼稚園にもチラシを配ったり、案内もしているんですが。虹の喫茶自体をもっと開放したほうがいいと思っただけ、もっと異年齢の人が参加できるような、子育て支援の方たちとかも、参加できてもいいのかなあ。ただ、会のメンバーとはそういう話をしたことはあるんですけど、まだそれはちょっと待ってくれという感じなんです。小学生や中学生が参加するということは、ここがたまり場や居場所作りになって、非常にいいのではないかと思います。地域のおじいちゃんやおばあちゃんがどっついうふうなのか、ということを間近に見てもらえるんじゃないかと思えます。

岐阜大学の地域科学部の学生さんも来て、フィールドワークをさせていただいていますので、新しい考え方を取り入れていくのも面白いかなと思います。ただ、学生さんは全然違うなあと思います。異次元の考え方を持って見えますね。「俺には関係ない」というような雰囲気を感じましたね。

次のステップへ、意志を持って「生きていく」から、「生きていく」に変えていかなくちやいかなあと思っただけ。これは「おたがいさしましなね」の事例なんですけど、島根で援助を受けた方は、「今度はあなたが違う人を援助してみませんか」ということで、自分が人に役立つということをやると、「生きていく」から「生きていく」、意思（意志）を持った参加に変わっていくよという感じ、そういう意思を持った喫茶にしていかな

くちやいかんねというところまでは話をしています。自らのチラシを配るということもしないかん（しなければいけない）のじゃないか、ということも話をしています。また模索中でなかなかできていません。私も家族もここで安心して住み続けたいね、と思ってる住民がどのくらいいるのか？ということですよ。

そのことはいろいろな場で思います。そういう人が多くなると、自治会活動も頻繁にできるだろうし、いろんなことがしやすいと思います。それは住民が主体となる、構えない共助活動づくり、もっと気楽な共助活動。生協のお店で夏祭りをするような雰囲気がいいと思うんですね、気楽にバザーに参加する。自分たちでやってみるだとか。いろんな実践をしてくる中で、行政へ実践報告して、新たな提案して資金も得られるようになってくる。この喫茶を始めたことで、紅葉が丘では空き家を使ってサロンが生まれています。月一回の様ですけど。これがもっといっぱい出来るといいね、という話もあります。

私の独り言です。日本中で抱えている問題なんですけど、真っ向から捉え切れていないという問題で、いずれこういう時代が来るんじゃないかということです。少子高齢化社会について、もうちょっと真剣に考えていかなくてはいいかんのじゃないか、ほんとに。うちの子ども達が、「僕らが歳をとっても、年金がもらえないけど・・・」と文句を言っています。どうしていいんやということですよ。

更に低所得者層が増加していく。複雑な格差や孤立社会がどんどん生まれてくるんじゃないかと思っています。目に見えない差別がいっぱい生まれているんだと思います。それはこの住民同士の中にもあるんじゃない

かと思っています。人間関係の希薄さ、利己主義といじめと虐待はさらに増えていくんじゃないかと思っています。そんな中で改めて人権とは何か？ってこと、命の尊厳とは何か？

「逝く自由」と書いたんですが、孤立死の中で。インターネットで検索していると、一人で死んでいく自由もあるんじゃないか、ということを書かれている文章があって、一人で死んでいきたいという人もいるんじゃないか、それもその人の自由ではないかという文章があって、それもそうだと思います。ただ、そうはしたくないなと思いました。

生協の使命ってなんだろう？と思ったんですけど。組合員への最大の奉仕って言うんですけど、組合員だけに奉仕をしてはいかんなと、今は思っています。地域の人がいてこそ生協があるわけですから。

賀川豊彦さんが、僕は会ったことが無いですが、神戸で貧しい人たちをどんどん救っていった。関東大震災の時は関東に行って困っている人を助けたということがあるんですけど、

生協がそういうことをリーダーシップをとっていけるのかな？ということをお思います。

片や、事業、事業と言いながら、数字ばかりぼっていく面もありますので、そういうところでどうなのかと思います。まさに一人が万人のためにということがどこまで追求できるかな、ということも思います。最終的には、人の心の支えになるのは人だと思つので。ペットが友達では、ちょっといかんと思つので、そこに人、生協が関与できるのが一番いいのかなと思います。人がいれば意思疎通ができますので、そこか

ら次に伝わるものがあるんじゃないかなあと思います。

エリアマネージャーとして私がどんなことをしているかというのは・・・。

組織活動と対外的な関係、CRS活動をやっております。自治体や諸団体からの要請もほとんど、学校からの要請も。今日も中学校からありましたが、ハンドインハンドに出たいんだけどどうしたらいいですかと。

本部の方ではブースアクション、平和の関係の仕事などもしています。

最後ですけど、たまたま希望の一本松の写真を見つけて、これって孤独だったんだろうなと思って。「最後の松はどうなったの?」って嫁に聞いたんです。生きていますか?」

(枯れたんです) 人間もいつか一人になって枯れちゃうんだと思いますけれど。それぞれのステージをどう過ごすかっていうことを想いました。

まだまだ会はスタートしたばかりですので、これからどうなっていくのかなと思います。

●仲田さん：ありがとうございます。

森さんのお話、小池田さんや豊田さんとも共通する部分が多くさんあるかなと思いました。河田さんお願いします。

●河田さん：森さんは「会」との関わりや生協との位置づけは、どうなっているのですか？

↓森さん：生協の中では、もともと会が出来る前に、川崎理事長とこの地域の理事をしていた國本さんとの会談があって、孤立死者がいるのでこれ以上増やさないためにどうにかしたいねということで、生協も手伝ってくれというご相談があって、そのあといろんな部局の人間が入ったんですよ。5人ぐらい。最後、うちの副理事長の紅谷さんも入っていたんですが、みなさん手放しちゃって。最後、たまたま僕がこの圏域のマネージャーだから「あんたやりゃー」って話になって。僕が関わったのが十一年度の三月からなんです。まだ2年目なんですけど。その前に十年度に実行委員会ができて、2009年から動き出しているんです。そのあと、人事の関係でたまたまやってくたさいということだと思います。

●椋木：川崎理事長さんからの命令は強いものがあった？

↓森さん：川崎さんは、「森が行け」というふうで言われたことです。僕は直接は、何も聞いていませんが。

●椋木：今言われた組合員理事だった國本さんには、本当は今日ここへ来ていただきたいと思っていたのですが。夫の看護で来られないので残念ですが。彼女の思いの強さというか、ご自身がずっと実践活動をして

いた。それが川崎理事長も動かしているんじゃないかと思いますが。

●森さん：國本さんは15年もふれあいサロンをやっているんですよ、お年寄りを集めて。月1回、催しものを虹の家でやったり、虹の家でやる以前は自宅や地域施設でやっていたんですけど、月一回やって400円かかるんです、食事を出すのに。それに来れない人をどうにかしたいねっていう話からもあったと思うんです。

僕はここの住民じゃないので、みなさんにも言っているんですが、部署が変わった場合などは手が離れてしまつかもしれないけど、出来るだけ来るようにするにはするつもりでね。私自身もすごく勉強になっています、いろんな人と話をしていて、人が集まるとというのが非常に大事だというのが良くわかりましたので。

●河田さん：コープあいちにもエリアマネージャーという役割があるんですが、全然違うんです。まさにこういう形で展開できると相当違ってへる。

●仲田さん：協同組合の職員の方は、憲法二十五条だけは全員が知っているというふうにお願して、では河田さん。

●河田さん：先回ご報告しましたので、明日第三回の全体会、モデル地域でやっている状況を集約した上で、あと3か月ぐらいで終了するんですけれども、次の年度にどう引き継いでいくかという、そんな論議を少しずつしております。

千種では先回ご報告しましたように、生協だけではなく地域のいろんな方が参加いただいて、ぜひ顔が見える関係、つながりをもっと作って行きましょうということを取り組んでいます。特に困りごとの問題では、高齢者と子育て世代の問題がたくさん出されましたので、このマップもそういう意味では、高齢者と子育てということをポイントに、小学校も入れて作ってあります。一応千種区の15学区の名前を全部入れたんですけども、全部の情報は入れられないので、5学区ぐらいを中心にだいたいの情報を入れてあります。

私も区役所へ何回も足を運びまして、福祉課、民生子ども課、保健所にも顔を出しました。いろいろ窓口があってそれぞれマップも作っているんですが、なかなか活用されないんですね。

そんなこともあって、今回こんなことをやりますからということでご案内をして……。消費生活センター、法テラス、シルバー人材センターにも訪れました。シルバー人材センターへ行きまして、所長さんにもお会いしたら、ちょうど名古屋市中から来た方で、「コープあいちが合併する時には、私もしセブションには出させていただきました。」とおっしゃって。

シルバーさんも名古屋市内では人数がたくさんいて、7〜8割の方が年一回以上活動をやっていらっしゃるんですけど、コープあいちやたすけあいの会と絡み合ってます。ぜひ情報を交換しあって、補いあっていきましようということをやっています。

昨日電話で、マンシヨンの障子を張り替えて欲しいと相談がありました。こちらでやると結構お金がかかってしまうんですね。1時間1,200円だとか、2枚やるのと時間ぐらいかかるから・・・。シルバーさんに聞いたら二つ1,200円でやりますということなんで、そちらをお願いしてやっていただきました。そんな連携が少しずい・・・。

こんなのを作りましたので使っていきますしということと、昨日、ちよつとこういう団体に集まっていたいて、「安心して暮らせる地域づくり」をテーマで交流会をやりました。26名が参加していただいて、いろいろな報告、ちよつと時間が足りなかったんですけども、交流ができて良かったなということとです。

この間、この取組についてはご意見をいただいていた民生委員さんも、この交流会に出れて結構よかったと・・・、終わった時にはニコニコで帰られました。

昨日の様子はコープあいちのHPの「地域支え合い」のところをクリックしていただくと、一番トップに写真入りで紹介されています。

森さんのご報告された内容は、いろいろな状況は違いますが、正に同じテーマなので、どこでも高齢化はど

どんどん進んでいるし、一人暮らしは増えていきますし、その中で地域差はあるんです。この辺は、民生員さんが訪問しても「来てくれるな」とか、月木会という夕食を届けているボランティアさんに、「月木会と言ってくるな。黙って置いて」とか。そういう方が結構まだいらっしやるんですね。月木会にもボランティアさんがたくさん参加いただいているんですが、八十歳を超える方も配達で参加されています。そうすると、行く家を間違えて「出てこなかった」と言ってお帰って来たり、弁当を持って行ったら空のを持ってこないで、持っていくた弁当をまた持って帰ったり・・・フォローが大変だとおっしゃっていただけ、その方とお話を1時間も2時間も話をされて、帰って来ないからどこかで倒れているんじゃないかと思ったら、いやちょっと話し込んだと言ってるね。そういう方にも生きがいになる活動になっていて、大変素晴らしいなと思いました。これは効率とは違うレベルの話ですけど。

昨日、最後に、栗本さんが町内会を作った経験を報告されたんですけど、一番最後に、人間には3つの欲望があって・・・

三つ目は群がるという欲求で、集団欲がある。自分は一人だと言っているけど、寂しいから絶対一人ほっちにするなということをやっていく。これが結局は地域づくりとか、暮らし安い地域を作るものになるんだというお話をされて、なるほどなと私も思いました。

● 仲田さん：ありがとうございます。三月にまとめが出るんですね。

小池田さんも関わっていらっしやいますね。

-----休憩中のはなし-----

● 椋木：先ほど外国人とおっしゃったんですけど、ブラジル系の方ですか？

↓ 森さん：いや、在日の方です。

● 森さん：いろんな人と団体の紹介を兼ねて、「タウンあくたみ」を出したんですけど、

「環境を考える会」は当初、大洞団地の環境を考える中で70人くらい会員がいたそうですが、今は数人に。

生協の組合員さんがいっぱいいらっしやいますので、生協のことも書いていただいて、たすけあいの会のことも書いていただいて。年会費が1,200円、毎月発行。ただ会員だけに配布するだけではなくて、健康友の会だとかみどり病院の利用者にも配布しているということなんです。

● 向井さん：さっきの土曜日の集まり〇〇さんが顔を出してくれたとか。

↓森さん：みどり病院からは来ていたかもしれませんが。うちのケアマネは、あんまり……。ここ（虹の家）の2階のケアマネさんは……。

●椋木：芥見店のお店と直接にはコープあいちのようにはつながっていませんね。軒先でフリーマーケットができるようになった、今年からっていうことですが。

●森さん：虹の家の鍵の管理は芥見店がやっているんですよ。いつも顔を出しているんですが。芥見店も要望が多くて……。商品を配達してほしいとか。店長さんも「あなたにだけやるわけにもいかんもんで」という会話、結構長いこと話されるみたいですけど。

そういう課題もあるんですけど、なかなかボランティアまで立ち上がらないのが現実です。以前、御用聞きをやりましたよとかという話が出ていますが、なかなかそこまで行かないみたいです。

●仲田さん：今お店はいくつありますか？

↓森さん：5つかな。

●向井さん：ぎぶのほうは何年になるんですか？

↓森さん：合併以前、岐阜地区市民生協からですと約40年くらいかな？

●向井さん：コープあいちでよく言われる高齢者の認知症の方への対応・・・どうするかという・・・、ほぼ担当が一人はそういう方に関わっている事例が名東センターであって。今日も報告があったけど、担当者が知っているレベルをちゃんとセンター長が情報集約している。

たぶん数年で起きる、直接に組合員に関わる地域の問題が、大勢の職員が直面する仕事上の対応の問題がある。こういうことを積み上げていくと・・・どう考えたらよいか・・・。

●森さん：普通の組合員さんと会って話しをするのは、とにかく、利用者懇談会とか人が集まる場を作ろうねって話をしているんですよ。そのことが次のステップにつながるから。何が起きるのかわかりませんので、向こう三軒両隣、災害が起きたとき助けられるし、地域のいろんな課題、やはり地域の人たちの力がないと解決できませんので、そのときに集まる場が大事だからということでは、いつも集まる場を作ろうね、いい場つくりしましょうねという話になっていますよね。

休憩 おわり

●仲田さん：では本格的に始めます。では後半を始めます。

●椋木：今のご報告の中で、一人独居、あるいは二人だけの暮らしをされている方が本当に多いという、具体的に数字が上がっていましたんで、あらためてびっくりしたんです。

うちは、今は息子がいますので3人ですが、来年からは息子が外へ出ますので夫婦だけになるんですね。あつそうかと思いつながら、もう、家族で暮らすというのが昔のイメージじゃなくなったなあ、これもちゃんと肝に銘じないと安心して暮らせるまちづくりというのも、どうやっていくかって、根本から捉えなおさなければいけないなという感じを先ほどの話で持ったんです。小池田さんはかなり緻密にやっていますしやっ、お話もずいぶんお聞きました、こちらよりは新しいということですけど、その辺の捉え方って……。

●小池田さん：今の話を聞いていて……、市営住宅、公営住宅の入居者で、1970年前後を境にして公営住宅ができてきた時代で、あの頃大量建設時代で、ちょうど高度経済成長政策で、人口が都市に集中してきて……本来は企業が住宅を保障しなければいけんのだけど、みんな行政任せになっていた。その頃、住宅要求が強かったということもあって公営住宅が大量にできた時代で、名古屋の市営住宅も6万個あるうち

に約の割以上が昭和四十年代にできた住宅です。

昭和四十年代にできた名古屋市の市営住宅、大洞と一緒に超高齢化です。先ほど憲法二十五条の精神にのっとりという話が出てきたんですが、公営住宅の方も目的が、健康で文化的な最低限度の生活を有する住宅を低所得者に低廉な家賃で提供するという主旨のことがちゃんと書いてあるんだね。それが1996年に公営住宅法の抜本的な、我々でいうと改悪になるんですが、低所得者に低廉な家賃という文言はかわらないんですが、当時審議会の中でできたんだね。今まで一般的に低所得者に低廉な家賃で健康的で文化的な住宅を、という文言ですつときたのに、真に低所得者、真に住宅に困窮する低所得者、真に住宅に困窮する低所得者に提供する、ということとそこで収入基準が、96年までは下から33%の所得階層が入居できる仕組みだったのを25%に引き下げた。そうすると下から四分の一ということ、それ以上の人は公営住宅に入居できませんという仕組みにしてみました。

で、合わせて、収入基準の金額が月額所得20万です。それ以上ある世帯は、公営住宅には入居できないということになった。それから2009年から更に下がって、現在月額所得158,000円です。

158,000円を超える世帯は公営住宅に入る資格がないわけです。さらに収入基準がありまして、家賃は収入によって決まるという仕組みになっていますので、現在の名古屋市の収入基準は 月額所得104,000円以下なんです。

名古屋の市営住宅では71%なんです。つまり、超低所得者が公営住宅に習住化しているということが一つ。その超低取得者は高齢世帯が多いということがあるし。そういうことでいくと、大洞の住宅だってわれわれの団地だって基本的には同じような状況。

昭和四十年代の大量建設時代の住宅の家賃は、広さや条件によって家賃の構成が変わるんですが・・・大洞の市営住宅と二階建ての簡易住宅は家賃が7,000円だとか8,000円になると思う。名古屋の市営住宅も古い四十年代の住宅でいくと、7〜8000円の家賃。森の里団地では一番安く15,000円。面積は60平米。3DK。福祉減額を受けて15,000円になる。その158,000円を超える世帯、収入超過世帯というのですが、48,000円です。

月額所得これは家族合算ですよ。317,000円を超える、高額所得ということになって明け渡さなければいかん。317,000円を超えると近くのマンション並みの家賃を適用されるんですけども、うちの団地でいうと56,000円。半年たって出ていかないと、その2倍の家賃を徴収されるという法律上の・・・になっていきますので、そういうると実質追い出さわね。

日本の公営住宅のしくみは追い出す仕組みでできている、世界でそんなしくみがあるのは日本だけというようになことを聞いております。

そういうことで、名古屋市の市営住宅6万戸のうちの7割以上が、14,000円以下の所得でくらす低所

得者がいるという実態がある。僕のところの団地では、一人暮らしの世帯は全戸数1,252世帯のうち、180世帯が一人暮らし。一人で暮らしている人たちがどういう人達かというところ、結果配偶者が亡くなって一人になったという人もいれば、離婚で一人になったという人も・・・いろいろですが。六十五歳を超える一人暮らしの人が180世帯いるということは、孤立死がいつ起きても不思議ではないという状況ですね。自治会としてこういう人たちの命を守るにはどうしたらいいか、というかという発想で。

身内が近くにいない方々については、いざという時には自治会が救出救護するしくみを作っていくということ、2005年から鍵を預かる事業を展開した。

最初は30世帯ぐらいだったんですが、現在は60数世帯の玄関の鍵を預かっておるといふ状況で、年に7〜8回鍵を持って出勤します。たまには鍵を落ちしちゃって失えたという人もありますけどね。

森の里団地での孤立死は、2009年の十月から2010年の十一月の1年間で4人の方が孤立死。これが最初に最後になっていますが、今のところ。亡くなった方の年齢を見ると50代の男性の一人暮らしが二人、七十二歳の男性、もう一人が八十一歳の女性ということでした。

最初になくなったら50代の男性はもう九月の終わりぐらいに亡くなって、十月の終わりに発見したんだけど、僕が入った時には遺体はとろけていました。どんな状況でわかったかというところ、その人は1ヶ月のうち二十日くらいは出張のお仕事で外に出ている。一人で暮らしているので近所との関係がなくて、また出張に言

っとるんだらうということぐらいにしか思わなかったということだ。

それ以外の3人の方は1日から3日のうちに発見している。この3人の方の状況を調べてみると、ご近所とのつながりが結構ある。あれ、隣の人がおかしいじゃないかという、そういうようなことで発見ができた。180世帯の人たちが一人で暮らしていて、いつ死があってもしかたがないし、これは避けられないだろうと。孤立死になってからどれだけ早い時間で発見あげられるかが、我々の実力だろうなというふうに思っています。

夫婦二人世帯も結構多いんです、高齢での。夫婦二人世帯の孤立死が起きる危険性は大きいんですよ。どっちかが旅行に行っている間に亡くなるということも考えられる。そついつつ公営住宅の制度的な側面から、高齢者や超低所得者が集住化しているのが一つ。

結果として一人暮らしの高齢者、1割以上の人が家賃を滞納しているという状況がある。

これは森の里団地だけではなくて、比較的高齢化率は低いほうで、昭和四十年代に大量にできた古い公営住宅がある。十一月でしたか、愛知県の公共賃貸住宅の孤立死、過去3年間で三百数十人、一年間で百人以上の方が死んでいると、そのうちの半分くらいが名古屋市の市営住宅で孤立死している。これは名古屋市当局と話をする中でわかってきました。そういう公営住宅の特殊な状況があるんだということです。

今、アンケートを自治会が取ってます、社会福祉協議会と全面的に協力し合ってます。このアンケートをして、

団地の実態を把握しながら新しい自治会の方針を打ち立てて行くかと思っっていますが。

●仲田さん：例の新しい公共のモデル事業・・・の一環として？

↓小池田さん：そうではなくて、社会福祉協議会。公団住宅に鳴子団地があります。昭和四十年代にニュータウン政策でできた、あの頃の団地で古い団地で、鳴子団地は自治会がないんです。一人暮らしの高齢者が多い。

実は公団住宅の人たちは悩んでいるんですね。なぜかというと、建替すれば数倍の家賃になるんですね。建て替えて入ろうとすると、戻っては行けないんですね。制度が違つんですね。ですから戻り入居はできないということ、ですから、公団住宅の入居者は建て替えをするということと反対運動が起きるんだけど、公営住宅は建て替えをするというと喜びんです。そういう公団と公営の違いがありますが、でも、合わせて公共賃貸住宅というんだけ。

公団の人たちは年金生活者が多いんです。この人達は公営住宅の入居階層の人なんです。

それとも一つ、民間住宅に住んでいる人たちも月額所得で言うと、158,000円を切っている人たちが多くいるんです。

158,000円は所得ですので、いろんな控除を引いて残りの、月収ではなくて・・・。158,000円の上か下かで、下なら入れる。そういうふうで、民間賃貸住宅に住んでいる158,000円以下の人た

ちがいったばいい。こういう人たちが公営住宅へ入りたくても入れない。名古屋の市営住宅に限って言うと、応募倍率は20倍の倍率、年四回の応募で。単身高齢者で言うと40倍。この単身高齢者はまさに狭き門でなかなか入れないという厳しい住宅事情がある。民間賃貸住宅に住んでいる公営住宅階層の方々に、政策としては住宅を作ればいいが、今名古屋の市営住宅は、この12年間新規に作っていない。2006年から5〜6年間に、全国の公営住宅では32,000戸削減されたんです。削減の方向。住宅は自助努力。建て替えると戸数を減らしている状況ですから、むしろ削減の方向。

住宅政策上の問題も議論していかないかな。そいつの中で、現実の状況から出発していくというのが我々のスタンスです。

今言ったふれあい喫茶室のような喫茶室を、コープあいちやコープぎぶが主導して作ってくれればいいんですよ。我々でいくと、2001年からふれあい喫茶ということで、毎月一回集会所を使って、これは自治会主催している。利用者は八時半から十一時ちょっと過ぎまで、月一回120〜130人、200円でコーヒ―やミルクやジュース、パンや卵。

利用する対象は高齢者だけではなくて、家族連れやおじいさんが孫を連れてくるとか……。住民の声としては、毎週やってくれということですが、なかなかそこまでスタッフを……。現在は月一回。それ以外に高齢者と小学生が触れ合う会食会を年三回やっています。

本格的な厨房もありますので、シンクだけでも6個あります。ガスコンロも家庭用ではなくて料理屋さん用のを、600万かけて2000年に作った。近い将来の高齢化に備えて、配食をやるつもりという意図はあったんです。

小学生を呼んで、高齢者とスタッフ入れて100人くらい。100人が会食会をする時にはその厨房で、主に民生委員が手料理、食器は150食分あります。

最初の投資に、お金がかかったですが。

●仲田さん：ありがとうございます。

一つ質問ですが、協同組合事業との関係ですが……。コープあいちにしろ、三重にしても、社会福祉の領域の視野で見ると、高齢者介護の問題、介護保険を使った介護事業ですよ。本体事業としては購買事業だけではなくて、そのへんがどうなっているか。この地域とコープぎふではどんなふうになっているのか。

↓森さん：福祉事業部とは直接的なつながりは弱いですね。それよりもみどり病院の健康友の会とのほうが、この地域では歴史的に強いつながりがありますね。

●仲田さん：コープあいちの場合は本体事業としてやっているじゃない、三重もそうだね。コープみえも

協同組合事業として介護保険事業を。岐阜もやっていますね。

● 椋木：虹の家の二階にヘルパーステーションを置いていて、それは新しいんですね。そこに介護保険事業の一つの部門を持ってきたわけですね。地域密着？

↓ 森さん：まだ時間がかかりそうですね。あそここのスタッフ自身が、ここの地域のことをまだあまりわかっていませんので。一階玄関に鍵をかつちゅうんです。二階にありますから、インターフォンじゃべるんです。それはやめろと言ったんですけど。「鍵の管理も含めて、一階の管理もしてくださいよ」って言ったんだけど、「ようやくやしません」ということで、今はわざわざ店に鍵を借りたり返したりしている。福祉事業部が常駐しているのなら施設管理をしてくださいよって言ったんですけど、出来ないと言われました。

利用が増えない理由を、みどり病院のせいになっているところもあるんです。この地域だけじゃなくて、少し離れば、南の長森だとか関の方へ行ってもらってもいいんだけど。まだまだ正直いって、地域とのつながりが弱いです。

● 飯村さん：三重も実は医療福祉協さんとコープみえが話し合いの場を持ってきていたのですが、私が理事を降りてから一度もまだ会合がないんです。年内もなくて、結局そのままになっているんですね。理事さ

んの予定がつかないのでおっしやるもんだから、「それは違うやろ」。せっかくちょっとずつ積み上げてきて、お互いにこうするといねって言う話になってたのに、そこでぴつっと止まったままになっているんです。私は今、組合員ですけど理事ではないので、実際今、医療福祉生協さんとの関わりのほうが強いので、医療福祉生協さんの会合に出ようと思ってはいたんですけど、何回言っても事務局が動かないんです。日程も組めないと言われて。今の理事さんの状況では話し合いの場は持てないだろうという話だったので、それはおかしいなあと思ってはいるんですけど。そのへんでもっとうまくすり合わせができなかった？せっかく積み上げてきたのに、何をしてきたのかな。

コーディネータさんの企画で、今シアタの交流会をさせていただいてはいるんですが、そちらも宣伝不足かもしれないのですが、受ける年齢と違うという方もいらっしやるかもしれないし、音楽をやったから体操をするので音楽は苦手という人もみえるかもしれない。日程的に無理という人もいるんですが。

一番最高でも13人くらいしか集まってきたいてないんですね。自分も待っていたってしょうがないと思って区社協さんに働きかけをして、どんな感じで活動するのがいいのか、今試行錯誤しているんですけど。自分は一市民なので何もないじゃないですか、市の社協さんとはつながりはあるんですが、センターのあるところの地区社協さんとは自分とはつながりはないんです。そこへ行っても自分だけが行くのもおかしいし……どうやったらコープめえと、うまくつながって行くのか全然わからない状態なので。

● 椋木：一つは、組合員さんの意識と行動力が一つ鍵を握っているのではないかと思っていて、大洞のころでも國本さんのためまぬ努力が動かしだした。彼女自身がいろんな組織に関わっている人なんです。そういう組合員さんを抱かえ込むことができるのが生協っていうように思いたくて……。生協の職員さんでも森さんのような人がいて、そういう組合員さんの気持ちを受け止めてくれたり……。今回は川崎さんかというのがあると思うんだけど、生協ってというのはそういう組合員さんの熱い気持ちを受け止めて、組織と組織をつなげることもできないかなあ……。組合員としては。どうなんでしょうか。

● 森さん：生協はそこに参加することはできるんだけど、生協がイニシアチブを取る必要はないと思うんです。生協にはハードルがある、加入、出資金をいただく……。出資利用運営……。増資もしてくださいと言われるだろうし。みどり病院でも施設を作るのにカンパを呼び掛けたんだけど、「募金がきんもんで、病院も利用できなくなる」ってお医者さんに訊いたという人もみえます。やっぱり、お金の問題が絡んでくるので。生協をやっている方は一定の所得のある方が多いので、地域住民がどれだけ動けるかというのが非常に大切かなと。生協の話がでしたが、僕が生協の職員であれば、ここに行かないかんのだけだと、更に優先する仕事があれば、そっちへ行っちゃいます。生協の人って、ここへ来てくれと言ってもす

ぐに動けないんですよ、社協の人も・・・そういうことも見えていますんで、社協もあてにすぎてはと。社協の人も個人の力が全然違いますし、やっぱり向こう三軒両隣の人が声を掛けるのが一番いいのかな、地域の人でこの人を知っている人が声を掛けるのが一番強いなあってことは思います。

生協がといっても生協の職員もみんな他の住民で、配達担当者は表面的なところは見て話での生活情報は持っています、なかなか入りきれないところがありますね。

●仲田さん：両方の指摘は大事で良く分かるんですが、僕の理解は研究センターの常任理事会や生協のあり方検討会でずっと議論していることに関わって言うと・・・。生協ってもともと仕事と活動が混在しているでしょ。それで、新しい仕事おこしという視点を入れることによって、仕事と活動が結び付くというふうにずっと思っている。

この地域のことで言えば、組合員って言うのは、問題関心を持つ人と当事者が孤立化や高齢化の問題、日々の生活の問題をどういうふうにしたら打開できるかというふうに考えるところ。そのときに、組合員の方と業務としての職員が結び付くと思っている。だからそういうふうにして、仕事おこしとして、ここでもやっていけばいいかな。確か介護保険は員外利用は撤廃しているので・・・。協同組合事業としては従来の員外利用禁止規定に捕らわれないで地域の生活に関わる事業がいっぱい出来るようになっていっていると思うので。

(組合員の利用と同等まで：向井さん)

事実上、福祉に関わる事業っていろいろのは員外規制がないというふうに考えて実践できると思うんですけどね。

● 椋木：事業を起こすときでも、即事業化できるという発想ではなくて、そこにはもっ少し・・・。前段階のものをちゃんと一緒にやっておいて、活動レベルでやっておいてそれを事業化していく、それが事業としての成功に。そういう見方がとても必要だというふうに、組合員側としては。事業は成功してもらわなければ、赤字ばかりじゃなくて。ちゃんと確実な事業をやってもらうためにはそれが必要だし、組合員としての役割もあるだろうというふうに思えていてね。だからその辺、生協のいいところというか・・・。

● 森さん：コープぎぶが弱いところでもあるんですが、コープぎぶの福祉事業は今赤字の事業ですね、職員は心のなかに赤字事業をやっているという意識、一面的には閉塞感もあるんですかね？。そういう気持ちを持ちながら、この先本当に福祉の仕事ができるかいなと思って。制度の変化が多い中で、経費を減らしながら、1時間でも活動時間を、一人でも利用者を増やさないかとか、稼ぎの数字にぼわれた中で、質の高い福祉の仕事ができるのかと考えちゃう時もあるんです。

● 仲田さん：組合員参加だと思うけどね。たとえば南医療生協、僕も一昨日は組合員の立場で地域訪問に入っていたんですけど、グループホームづくりは組合員の問題意識ですと準備を進めて、それを介護保険事業として立ち上げてきた経緯があるんです。だから自分たちがいろいろ準備をしてきて、事業化できるというところで実際に、事業は法人の事業としてしかできないもんだから。やってきた経過を見ると、やはり職員と組合員が一緒にやれば良いと思う。この地域でも必要な生活事業がいっぱい起こせるような気がしているんですけど。ぎふはまだそうならない？

● 椋木：とりあえずはエリアマネージャーというこの仕事を、職員の方たちがやり始めたということはかなり大きくて、森さんが仕事として成果を出すか・・・。

↓ 森さん：僕自身の経験学習の世界ですから。このような事業が岐阜市の京町であったり、それは岐阜県の中でもいっぱい動かししているんですね。そんなような状況の中にいる人たちと情報交換する中で、こういう事例が良いとか、それを会に持ち帰って話をするくらいで。この南医療生協でも班作りとかやっているんですけど、うちの虹の喫茶でも本当は班組織にするといいなあと思っていて。そうするとここに来る仲の良い人たちが、自分の好きな絵手紙やったり・・・。そういう構想を、僕は一応立場上話をさせてもらっていますが、そのときリーダーシップをとってくれる人がなかなか育たないんです。

●鈴木さん：学習会を非常に盛んにやっていて、自治会はどういう評価で？

↓森さん：自治会の方はあまり来てみえませんが。健康友の会がほとんどアボを取って調整されていますね。その前に会でも相談しますが。会場は虹の家か、みどり病院のホールのどちらかで。

●豊田さん：僕は二ト・ひきこもり、また同じように埋もれている。表に出てこない人たちがこういうところとクラブでできたらいいかなと思います。今やっているのは仕事づくり、いろんなところへ連れて行ったりしていますが。そういう人たちが、少しでも社会とのつながりを作っていくことだと思ひます。

今日も来ていた親世代が70くらい、大変不安な中で生きている。そういうことと言つと、同じつながりを持つていく必要があるかなど。時間がかかるかもしれない。

↓森さん：あまり重く考えないでやったほうがいいと思います。こういう時代が来るんだと、どこの地域でも、そう割り切つてやったほうがいいかなと思つて。その中でどれだけ共助できる人間がどれだけいるかという違いじゃないかと思うんですよ。ただ、共助ができる条件をどれだけ作れるかということが、これから課題になってくるんじゃないかと思ひます。

この間美濃加茂の人と話をして、そこも過疎地区の団地の人たちなんですけど、「実は昔よろずやをやっ

ていたんだ」という話で、そのときはいろんな人が寄ってきて、そこで立ち話をしたりだとか漬物をつまんでお茶飲んだりした時代はすごく楽しかったけど、今は店を閉めてしまつて寂しくなつた。子どもは、菓子を買いに寄りなくなつたし、もう一回やるうかなという話をしていて……。そういう人が寄ってくる場、移動販売の車もそうですけど、福井（生協）さんがやっている。今、恵那で実験をやつていて、私も見に行つたんですけど、来ると人が寄ってきて安否確認ができるんですね。そこで立ち話ができる、生協の昔の班共同購入と同じですね。そういう場を作っていく事で、次の変化ができるかということじゃないかと勝手に思っています。そういう場に出ている間はいいなあと思えます。自治会で寄り合いをしても、参加者がいつても決まったメンバーしか来ないとか、すごく少ない。自治会に入らないという人もみえますので、まち中でも。そういうのを少しずつ克服していつて地域で楽しい事例、コトを作っていくことが大事じゃないか。そういうふうに思っています。

●仲田さん：向井さんから残っていることについてと、今日の総評を。

●向井さん：森さんはエリアマネージャーとして、コープぎふはここに役員として入っているんですね、副会長として。組織として非常にしっかりと会を作つて参加するところは、積み上げがあつたことだ

と思うけど、すごい事例だと思うんですね。実際地域のまちづくりの意志を持って参加している。そういうふうに職員なりマネージャーが参加して、一緒に地域の問題を考えて、生協の持っている施設だとかつながりを生かしているということは、生協のひとつの方向だと思うんですね。大変参考になる事例だと思います。

関わられた生協の立場にとっても、たとえば福祉事業だとか、職員とか組合員との関係とか、みどり病院との介護保険事業における競争関係みたいな関係とか、社協さんも忙しいという風に、それぞれの仕事を持っている現状だとかがありますね。これを中身としてどう理解するか、ということが大事なことだと思うんですね。

今日の午前中は、小幡のお店でやっている、いっぴく茶屋というモデル事業の、小幡で地域会議があったんですけど、店長、共同購入のセンター長が参加し、社協さんが参加し、いきいき支援センター、地元のワーカーさん、医療生協、コープあいち、たすけあいの会、組合員のいちごの会（お店のコープの会）が参加して15、6人が集まって地域会議をしているんです。いつも顔を会わしている人たちですけど。いきいき支援センターからは、自分たちの相談の相当部分が、ちょっと離れたこのお店がある二十軒屋学区から来ていますと。カウントすると20件を超えました、これは多いですよ。お店でやっているいっぴく茶屋という相談の場が、自分たちの仕事の発信になっています。二つくらい事例を紹介していただいたんですけれども。

そういう評価があって、社協の方も買い物支援のクルマを出す事業をした、タクシー業界とのからみがあって特定の学区でしかできない、自分の経験から法的な縛りがあって、翻って思うと、それはお店で買い物をするタクシーなんです。デイサービスで雇って買物にいかない車を使った取り組みなんですけど、よくよく考えると、このお店と一緒に歩いて買い物に来るといって買い物支援だったら、法的な制約を超えてやれるし、見守りになるし、いいんじゃないですかという話をされたんですね。それぞれの人が生協のお店で出される情報だとか、高齢者が自分の足で買い物に行く、それを社協はサポートする仕組みを作る。その時に、それを結びつけてイメージされていて、お互いにそれを欲していると思うんです。

河田さんがさっき言った、昨日の交流会でもそれが起きたのは。初めは私たちは忙しいからこんなモデル事業なんてなにやっているのって何回も怒っていた人が、具体的な支援の事例交流をしたでしょ。本当は民生員だけど月に1回しか行けない。次に訪問するまでに、もし亡くなっていたら・・・っていう思いがある。ヘルパーさんは1週間に1遍行くから、もしヘルパーが行っているなら、本当は、私はヘルパーさんの話が聞きたい。そういう交流ができると、民生委員の仕事としても助かるというふうになって、ああそうですねということになった。その方はそういう発言をして、今日は非常によかったとここにこ顔で帰った。おそらく具体的事例の中で、どうやって自分が困っていることを補ってもらえるか。自分が思っていることをちょっと視線を変えるだけで、何だここにあったんじゃないか、という経験が見えると、忙しいとか、自

分の仕事だとか、私はこちらの相談があるからこっちはできないというふうに、初めは心理的には忙しいと思いますよね。やっぱり、解放されていく……。今コープあいちがやっているのはそういう意味でのモデル事業で、これはコープあいちがコーディネーターしなさいという事業なので、コーディネーターのレベルもいろいろあるんですけど。みなさん会議を持って集まっていたという話なんですけれど……。おそろく、そういうことにお互いが進んで行かなくてはいけない。生協がというよりも、自治会としてやって、そこに専門的な機能だとか、生協なども含めて活用していただけるでしょうし、そういうことをお互いに必要としている時代、森さんが言った、日本社会が共通して起こっているという……。だから共助の関係が必要だということ。たぶんそういうことではないかと思うので。

前回の議論と今回の……。じゃあ、本当にそういう地域問題について協同組合は出資し、組合員が利用し、所得も安定していたり……。なかなか他の組織と話し合う時間がないということかもしれないけれども、そういう現状がある協同組合は、地域社会の問題にどういふことがあるとよりの関わられるかという……。ひとつの大きなテーマかなと思います。

頑張るってやりなさいとか、やらなきゃダメだという言い方をしていくといけないので、時代の変化の中で、協同組合自身の視野だとか、協同組合が考える事業の広がりがどうか、我々ができるいい仕事、できる条件は誰との関係でできるかということ。もっとオープンに柔軟に見なおさないといけないかなと思います。地

域福祉の関係は、それだけでできていくとは思いませんが。協同組合がもう一つ変わり辛いとか、できないという関係を、どうやったら変化させていくかという非常に大きな問題として、議論をしていただいたので、次につながるんじゃないかと思いました。

今日の議論もみなさんの理解をいただいて、こういうパンフレットにまとめて論点を考えましょうというふうに、必要な事例もいただきましたので、ご紹介ができると思います。一回一回論点を詰めて、この世話人会でも積み上げていけたらと思います。

●仲田さん：ありがとうございます。この表の項目立てのところが変わってきているので、そのところを次回相談したいと思います。

2013年3月18日発行

NO.3

2012年12月6日

地域福祉を支える市民協同パネル・世話人会

「生協の地域での関わりをていねいに見る」

発行：地域福祉を支える市民協同パネル

〒464-0824名古屋市千種区稲舟通り1-39 地域と協同の研究センター

TEL:052-781-8280

FAX:052-781-8315